



高名なお坊さん（その13）

唯円 『歎異抄』の著者として有名な親鸞聖人の高弟

唯円は、俗名を北条平次郎とされ、元々は信仰心のかけらもない荒くれものだったそうです。ですが、妻は熱心な浄土宗の信者であり親鸞聖人の元に足しげく通い、阿弥陀仏の名前を書いた札である「お名号」をいただくほどでした。

しかし、そのお名号を平次郎は浮気の恋文と勘違いして激怒し、妻を切り殺して家の裏の竹やぶに埋めてしまいます。

ところが家に帰ると妻はいつものように平次郎を出迎えたのでした。驚いた平次郎が妻を埋めた竹藪を調べると、埋めた後には「お名号」が埋まっていたのでした。

この事に驚いた平次郎は、妻を切り殺した事を悔やみ、妻と一緒に親鸞聖人のもとに行き、この事を話すと、親鸞聖人は、「仏様は悪逆の者ですら、そのお光のうちに収めてくれるのです」と語り、それを聞いて平次郎は今



までの悪行を悔い改めて親鸞聖人の弟子になったのです。その教えを『歎異抄』にまとめたのでした。

後に唯円は河和田に在住し「河和田の唯円」として「唯円房道場」を開基します。それが現在、河和田の地に残る報仏寺の由緒となったのでありました。



報仏寺山門



報仏寺本堂

住職レター

年末にかけて、各門徒宅への報恩講参りが続き、その合間に年賀状を仕上げ、気付いたら大晦日となり、除夜の鐘を撞く準備です。除夜会が終わると、数時間後に始まる、元旦会の準備をして就寝。元旦の朝七時から、元旦会の読経。

この住職レターを書いている現在、外は大雪。ホワイトクリスマスになっているようですが、巷では、クリスマス寒波とのこと。明朝より法事が続く予定なので、これ以上の雪は降らないよう願っているのですが。

ふと、今年の「除夜の鐘」撞きを思い出しました。とても寒かった記憶があります。確か、大晦日の朝、大雪が降り、参道の雪をほうきで払い除けていました。この度のクリスマス寒波のお陰で、今年の大晦日は、穏やかな気候になることを願っています。どうでしょう。

大晦日のことを除日（じょじつ）といいます。「除」という言葉には、古いものを捨て新しいものに移るという意味があり、心穏やかに新年を迎えようという願いが込められているようです。

煩惱の数、百八あることから、一般的には、百八回、鐘を撞きますが、この辺は諸説あるようです。一年を表す月の数（十二）、二十四節気（二十四）、七十二候（七十二）、それぞれを足した数（四×九と八×九を足した数）を表す数という説もあります。何はともあれ、今年一年の感謝を込めて、『除夜の鐘』を撞きます。

